

だが 樹は立っていた

大賀二郎

薄明の時刻、夢をみていた。積乱雲に巻き込まれ、飛行機はすごいエアポケットに入った。そのショックで目が覚めた。本箱やタンスが踊っている。危ない。すぐ横揺れがきて、家具や板戸がどっと倒れた。横で寝ていた母と共にその下敷きになったが、奇跡的に無傷で脱出できた。家は辛うじて立っていた。

外に出て驚いた。家が道路に投げ出されている。どの家も満身創痍。夜が明けてきた。トラホームのような不気味な朝焼けであった。消防のサイレンが聞こえる。長田区南部の各所で煙が上がっていた。すでに電気、電話、水道、ガスのすべてが不通になっていた。

三宮、岡本、芦屋、西宮方面も被害甚大と報じられている。この方面に身内や友人がいる。翌日早朝、安否を尋ねに出かけた。交通機関は一切が不通。震災直後の阪神間を往復14時間かけて歩いた。激甚であった。長田、兵庫の建物は潰れたという感じであったが、東部はねじれ、裂けていた。何ともいえない静寂が漂っていた。高層マンションがのめるように傾いていた。平穏なビルもよくみると、どこかの階層が消えていた。神社の鳥居が落ちた。高架からレールがぶら下がっていた。花の名所満池谷の池は地底に吸い込まれていた。

防災都市構想が上がっている。M7でも耐えられる重厚な都市を目指すという。しかし無限の経費と時間をかけてもいいものではない。次にM8がくる可能性を否定できない。強固なものが地震に強いということにはならない。今回も建物や構造物の重量級のものが大きなダメージを受け、スリムなものに被害が少なかった。高速道路の巨大な柱が横転した。そのかたはらで街路樹は整然と立ち並んでいた。

わずか10数秒で阪神間の広域が破壊された。地震エネルギーに勝つことはできないと悟るべきだ。いかに抵抗なく過ぐすべきかを考えるときだ。

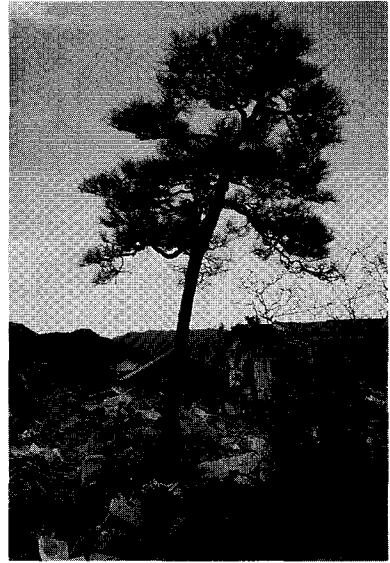
見渡すかぎりの廃墟のなかで、樹は立っていた。わずかの揺るぎもみせていなかった。樹の周りには意外な安全空間があった。

庭木にしても、街路・公園樹にしても、そして林野の自然木についても、例外なく無傷であった。庭木が住宅の倒壊を防いだと思えるような箇所もあった。網のような根が緩衝の働きをしたのだろう。

その後、地震が誘因となって枯死したことも聞かない。春になって、樹々はわずかの狂いもなく、荒涼とした倒壊原野のなかで、新芽をふき出した。廃墟の庭で、誰に見られることもなく、桜が満開であった。

これからは緑地空間、自然保護などの問題がより以上に論議されよう。

つぎに掲げる写真は、震災後3ヶ月程の間、被災地を廻り、厳然と立つ樹木の姿を撮影したものである。



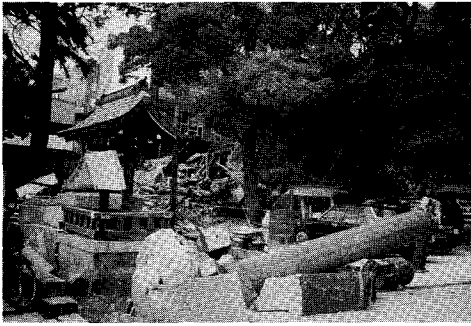
神戸市東灘区本山の住宅地で

3. 19. 1995

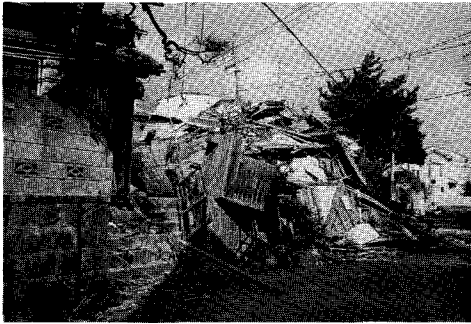


宝塚市内の寺院で

3. 20. 1995



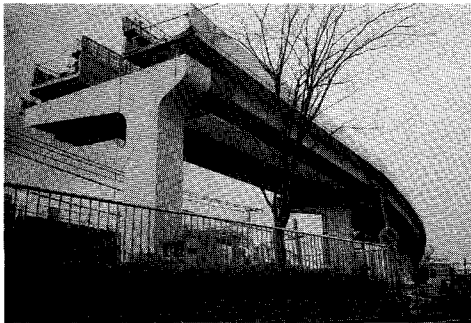
神戸市灘区内の神社で
2. 22. 1995



神戸市長田区北部の住宅地で
8. 11. 1995



神戸市長田区南部の商工業地で
2. 15. 1995



神戸市東灘区住吉で
(落下したモノレールの高架と細い木)
3. 19. 1995



神戸市東灘区岡本の駅前広場で
(時計台はその時刻を示していた)
3. 19. 1995



芦屋市内の倒壊家屋で
(花が供えられ、その上に樹が掌を広げていた)
3. 19. 1995